
夏に咲いた白詰草

玉梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏に咲いた白詰草

【Nコード】

N6508X

【作者名】

玉梓

【あらすじ】

高校1年の夏。4人の少女は戸惑い、戦い、そして成長していく・・・。4枚の葉が紡ぐ、4つの短編集。（この作品はpixivに投稿したものを一部改編したものです）

D i s t i n c t M e m o r y 過去 (前書き)

夏になれば思い出す。

木々の生い茂る山々と、冷やかな清水。そしていつも一緒だったみんなの笑顔…。

季節外れの白詰草、その1枚目が風に揺れる。

Distinct Memory 過去

窓の向こうでは、もう蝉が鳴き始めていた。

外はもう暑くて、この部屋も冷房が利いている。

机が規則正しく並べられた教室の中はざわつき、その前の教卓に立つ先生は上品に微笑みながら、しかし手に私たちの運命を手に、それを一人一人に配布していた。

私は先生に呼ばれると立ち上がり、前に歩み寄る。先生は「もう少し頑張りましょうね」と、小学生にでも言うような言葉を言いながら、私にそれを渡した。顔がゆがむ。

その言葉に、まだ見ぬ結果に落胆しながら席に着いた。

辺りを見渡し、安全なことを確認して、それ――1学期末考査の成績表をゆつくりと開く。

・・・

私は机に突っ伏し、大きくため息をついた。・・・案の定、悪い結果だったのだ。各教科の順位は3桁が多く、偏差値も45がほとんど。頭の悪いことは自分が一番分かっているが、それでもこの学校の下の方にいると思うと、気が沈んでしまう。

「ねえ、どうだった？」

「うわっ！」

耳元で聞こえた弾んだ声に私は肩をビクンと震わせて起き上がった。

彼女は両手を私の机にちょこんと置き、顔の上半分だけをのぞかせている。くりくりの瞳はどこまでも透き通り、純粹そのものであった。

「ま、まあそりゃ、悪かったよ」

「とかいってー。本当はいいんでしょう？」

「いや、本当に悪かったんだって」

「そっかー。でも美鈴みすずのうそ、絶対見破みやぶってやるからね！」

そう言い捨てる、彼女―この花ははうさぎのようにぴょんぴょんと教室を飛び跳ねて、千菜の元へ着地していった。

「うそ」って・・・本当なだけだな。

これならきつと、一つぐらいは補修確定だ。また気が重くなる。

まさか私がこんなに頭が悪いなんて、つい数ヶ月前は知らなかった。前いたあの村は、良いとか悪いとか、そんな争いごとは全く無くて、成績とかもあんまり関係なくて、都会はこんなはつきり良し悪しが決められるって知って、なんか・・・怖いと思った。

ああ、私、何でもここにいるのだろう。

・・・帰りたい。

木々の生い茂る、あの村へ・・・

ふと、まぶたを閉じてみる。すると私の足もとをすり抜けるように、触れたことのある冷ややかな風が吹いてきた。

サワサワ・・・

木々が静かに合唱をする。

前へ一歩踏み出す。すると右から左へ、あの川の、あの水が、私の裸足を包んだ気がした・・・。

私は生まれてから数ヶ月前まで、山に囲まれた田舎で育った。

のどかで、緑が濃くて、風が気持ちよくて、村全体が家族のようなものだったから、隣同士助け合ひのが当たり前、そんな村。

この村を通る一車線の電車は1・2時間に1本しか通らなかつた。り、天気が変わりやすかつたり、そのせいで道路が寸断されたりもするけど、自動車で30分ぐらいたとところに市街と呼べるほどの町があつたから、それほど不便ではなかつた。

人口が少なかったため、学校の生徒も少なかった。急な坂の上にそびえる小中学校の生徒は合わせて50人弱くらいで、もちろんクラスは一クラス。私たちの学年は、私も合わせて4人だった。

健太、威、舞子、そしてわたし美鈴。私たちは幼なじみで、同級生で、まるで兄弟だった。4人での話し声は、大きすぎる教室に響き、少し話せば先生に怒られる始末だった。

私たちはよく、村の近くにある小川で遊んだ。学校帰り、黒と赤のランドセルと、無造作に脱いだ靴下を放り投げ、ズボンをめくって、ごつごつした石が散らばる川岸を数歩で駆け抜けて、川に飛び込むのが、毎夏の楽しみだった。水底まではっきり見えるくらいに透き通った川の水は、毎年冷たくて、じりじりと照りつける太陽と反比例して気持ちよかった。

中学校になっても、小学生のときより頻度は減ったけど、時々暑くなると、その川へ通った。清水は日光を跳ね返し、きらきらと輝く。木々が川に木陰を作り、その隙間から照らす差し込む光が、なお綺麗だった。

こんな毎日が、十年も、二十年も続いて、4人で成人を向かえて、4人で仲良く、自然たっぷりのこの村で老いていくんだと、そうずっと思っていた。

「引っ越すことに、なった」

中学3年の時、父の転勤が決まり、私たちはその近くの――この村からはずっと遠いところへ引っ越さなくてはならなくなった。それを告げられた日、私は子どものように泣きじゃくって、部屋に鍵をかけて籠もった。

でも、3人にそのことを先生や村の人に告げられるよりは、私が言ったほうがいいと思って、いつもより早くに学校に来て、朝のSHR前に告白した。

広い教室の空気が、私の一言で変わったのが分かった。

「・・・うそ」

「本当だよ。みんなと一緒にの高校には行けない」

「意味わかんねーよ・・・」

反応は、私が思ったよりも冷たかった。でも、それで安心したようにも思った。

その日の授業は、いつもに比べて静かで、先生も「どうかしたか？」と首をかしげていた。

その日の放課後。

窓を見ると、昨日まで降っていた雪が解けきっていなくて、村はまだ雪化粧をしている様だった。ストーブをつけたこの教室も、曇った窓側へと行くと、ひゅうひゅうと隙間風の入る音が聞こえ、体が震える。

バッグに荷物をつめ、ふかふかのコートを羽織り、皆が帰ろうとしたとき、舞子が突然、教壇に上がった。

「川、行こうよ！」

両手で教卓を叩き、身を乗り出して発した声は、4人しかいない教室中に響いた。

急な提案に、誰も理解できず、私を含めた3人ともがきょとんとした目で舞子を見つめる。

「だからさ、このままじゃ嫌なの！！普通にお別れとか、そんなの絶対にイヤだから！！！」

必死に発言する舞子の目には、涙が潤んでいた。

広い教室に、静寂が満ちた・・・。

「・・・そうだな」

「おう！行こうぜ！！」

あの時の私たちに、冬とか雪とか、そんなことは関係のないことだった。ただ、もうあの川にみんな毎日入れないのが悔しくて、そんな運命を壊そうとしたのだ。

教室のドアを力強く開け、私たちは廊下を駆けて、学校を飛び出した。路面が凍り、滑りそうな道路を無我夢中で走る。顔にひんや

りとした風が打ち付け、息を吐くたび、白い息が空中に広がる。

4人の脚は、あの場所に向かっていた。

透き通って、ひんやりとした、私たちの思い出を含んだ、あの場所へ……。

その後、みんなが夏以上に冷え切った川に裸足で入った結果、風邪を引いたのは言うまでもない。でもそんな、白く染まった木や岩に囲まれながら遊ぶ水遊びは、あの村で十数年も過ごした中で、最高の思い出になった。

この都会に引っ越してきてから、遠くの場所になってしまったあの村へは、まだ一度も行っていない。今頃きつと、みんなはまた、あの川で裸足になりながら遊んでいるのだろう。大人気ない、とも言われながら。

ああ、あのひやつとする清水が恋しい。

3ヶ月くらいしか離れていないのに、そう思ってしまう。

でも、もう私は都会の住民だ。この区別される生活に慣れなければいけない。なのに、やはりあの村を思ってしまう。夏に近づけば近づくほど、なおさらだ。

「……聞ってる、美鈴？」

いつの間にか、またこの花が、今度は前の席に座って、私を覗き込んでいた。

「え、えっと……何？」

「だーかーらー、この夏休み、4人でどこか行かない?? せっかくの高校生なんだし、行こうよ!! ね、どこ行きたい??」

前を見ると、目の前の席に私を見つめるこの花、斜め前の席に読書をする千葉、千葉の前の席で笑顔を見せる明里がいた。これが今の、私にとって新しい4人組。

知り合いが誰もいない、新しい学校で、声をかけてもらって、仲良くなったクラスメート。3人といえることで、私は必死でこの生活

に慣れようとしている。

でも・・・

「・・・田舎に行きたいな」

私はやっぱり、過去に囚われたままだ。

D i s t i n c t M e m o r y（過去）（後書き）

ども、玉梓さんです。

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございました。

簡単に言いますと、この作品は短編であり、長編でもあり……。個々としても、1つの作品としても楽しんでもいただければ幸いです。

これ以上深々と話すると長くなる未来が見えるので、全ては最終話へ持っていきます。

つまり今伝えたかったのはそれだけです。

ちなみに全5話構成です。

文は全部出来てます。と、いうか、p i x i vで投稿したものを二重投稿しているだけなので、そちらに続きはあるんですがね。

さて、こんな短編がどのように話を進めていくのか、あまり期待せずに、

そして次回の投稿は作者の気分次第です。

I a m C h a i n e d（矜持）（前書き）

私は縛られている。母と、プライドと、昔の自分に。

季節外れの白詰草、2枚目の葉が乱れ落つ。

I am Chained (矜持)

「十歳で神童、十五歳で才子、二十歳過ぎればただの人」とは、本当にそうだと思う。それは、この私が証明している。

「ねえ、千菜はどうだった？」

教室の後ろから、机の森を掻き分け掻き分け、足にばねが付いたようにしゃがんだままぴょんぴょんと跳んできたこの花が私に問うた。

そんな私が手に持っていたのは、先ほど先生から帰ってきた、期末考査の成績表。総合成績のところには、「21」と順位がはつきりと示されている。

・・・駄目だ。

これじゃあ、母は喜ばない。

「・・・どうしたの、千菜？」

この花はまだ、私を無垢な目で見つめる。

いいよなあ、この花は。いつも楽しそうで、何も悩んでいなさそう。きつと、毎日が充実しているんだ。全く、勉強なんてしてなさそうな感じなのに・・・なのに、何で、いつも成績は1位か2位なわけ？私はこのように、こんなに、努力しているのに。

「・・・まあまあ」

「そっか」

この花は頬を桃色に染めて、満面の笑みをこぼした。そして来たとき同様、ばねのように飛び跳ねて、私の前の席の明里に話しかけていた。そこでもまた、明るい笑顔を見せていた。

じっと、彼女を見据えてみる。

この花にとって私は、この仲の良い4人組の中の1人という程度かもしれない。でも私にとってこの花は、

憧れで、

苛立ちで、

昔と今を重ね合わせてしまう原因・・・

そう、彼女を見るたび思い出す、自信に満ち、堂々とした姿勢・・・。
。忘れたい、でも忘れられない、私たちを縛り付ける者・・・。

私は「天才」と言われていた。

幼稚園の頃に、もうひらがなやカタカナが完璧に出来て、漢字も簡単なものなら書いて。算数だって、足し算引き算は完璧で・・・。
そんなの、自分だって出来ていたって子もいるかもしれないけど、私の周りでは、そんなことを出来たのは私しかいなかった。

近所でも、幼稚園でも、「頭がいい」「天才」っていろんな子のお母さんに言われて、それを誇りに思っていた。

しかし、私以上に誇りを持ったのは、私の母であった。

小学校に入り、ますますその「天才」ぶりを発揮した私は、先生にも褒められ、校長先生に褒められたこともあった。学級委員を決めるとき、推薦でいつも上げられるのは、私であった。

それに喜んだ母は、授業参観となると毎回駆けつけ、運動会は毎回一番前の席を取り、「あれは私の娘」という言葉を数え切れないほどの母親に語って、「天才児の母」として学校中に名を馳せた。

テストで100点は当たり前で、授業でもよくあてられた。

そして私は、先生にあてられながらも、分からない分からないと頭を抱える生徒を見て、心の中で思ったのだ。

こいつらは馬鹿だ、と。

小4になったころ、私は塾に入った。

母が、私を有名な私立の中学校に入れてあげる、と言い出したのだ。

塾にいる子たちは、小学校の子に比べて頭がよく、「馬鹿」とは思わなかった。しかしその中でも、私の成績はいつも一番だった。月に1度行われる統一テストでも、いつも上位には入っていた。

そしてそれがきくと、私の母を狂わせた。

6年生になって、志望校を確定する三者面談が塾で行われていた。クーラーの効いた広い教室の中央で、私と母、そして塾の先生が向かい合っている。静寂が、部屋を包む。いつもは十数人もいるのに、3人しかいない教室は、私にとって新鮮であった。

「・・・本当に、これでいいのでしょうか」

ぴしっとスーツを着こなした先生が、口角を無理に引きつらせて言う。震えた声は、不安そのものだった。

そんなこともよそに、私の隣に座る母は、背中を綺麗に伸ばし、顎を引き、両手をひざの上に置いていて、その瞳は大人気ないほどに輝いていた。

3人の間にある机の上には、母の綺麗な文字で書かれた、中学校の志望校が記されている。

第一志望校は、隣県にある、大学までエスカレーター式の超一流の名門校。第二志望校は、第一志望校よりは劣るが、それでもたくさん卒業生が有名大学に旅立っていく地元中学校だ。

「はい。何か問題でも？」

「い、いやあ・・・」

いつもは大きな声で熱心に授業を行う先生も、今日だけは頭が上がらないようだった。

「さすがにこの二つではリスクが大きすぎます。滑り止めを考えたほうがいいと思いますよ」

ちなみに、第一志望校の偏差値は70前後。第二志望校の偏差値は65前後である。

「だから、滑り止めはこの第二志望の中学校です」

母は自信有り気に言う。そして、言い切ったのだ。

「大丈夫です。私の千葉は『天才』なのですから」

その後、2つの受験を終えた数日後に私の家へ届いたのは、「不合格」とだけ書かれた一枚の紙の入った、2つの軽い封筒だった。

私は今でも覚えている。あの日、ダイニングで涙を流す母の姿を・・・顔を覆った手からあふれ出す、悲しみと、悔しさと・・・何かの涙を。

こうして私は、公立の中学に行くことになったのだが、当然、私も母も、周りからよく言われるようになった。何故、中学に落ちたのか、と。母が皆に言いふらしていたから、他の受験した人よりも、なおさら言われた。

だから決めたのだ。高校は絶対、いいところに行ってやる、と。ちゃんと自分の実力を把握して、精一杯勉強して、そして自分の望める、良い県立の高校へ行ってやる、と。

しかし、母はまだ、諦めていなかったのである。

母は私の志望校を勝手に決めた。今度は県内で一番頭の良い県立高校である。

しかし、劣っていく私の成績では、その高校へ行くことは難しか

った。だから私はきちんと、無理だと母に伝えた。

「千葉、そんなこと言わないの。あなたは『天才』なんだから」
それが母の返答であった。

あの時、それ以上反抗しなかったのは、自分で何かを感じたからだろう。それはきつと・・・

結局、私は高校受験にも失敗し、この私立高校に至る。

でも、もう母を苦しめたくないから、この学校内で高みを望んでいるのだが、昔のように上手くない。これが今の現状だ。それに母は、まだ気付いていない。

だから、

母は言い続ける。千葉は「天才」だ、と。

そう、母は縛り付けられているのだ。あの時の私が母に築いたプライドに。そして昔の私自身に。

そして私も縛られている。それはきつと、今頃気付いた、母を変えた自分への責任感。その責任感が、母への反抗をためらわせて、母の空想が止まらなくなっていく。

テスト返しを終えた教室は、ざわめきに包まれていた。

スクールバッグから取り出した文庫本を読むふりをして、ふいに再び、この花に目を向ける。

明里に笑顔を向けるこの花。無垢で何にも縛られていないその笑みは皆に安心を開放させる。

それに比べ私は、縛り、縛られ、母を蝕む、馬鹿な怪物だ。

ああ、何時になれば私は、自由になれるのだろうか。

私はふいに足を動かす。その足は重くて、鈍い金属音がしたよう

な気がした。

B l o o d y S o l d i e r 〽暴露〽 (前書き)

どんな人だって、隠したい過去があって、知られたくない真実がある。それはいつも明るく振る舞うあたしも同じ。

季節外れの白詰草、3枚目の葉は空を舞い踊る。

Bloody Soldier 暴露

言葉を発しようとするたび、あたしは怖れる。その言の葉は何を含んでいるのか、相手に何を与えるのか、発言者にとってそれが曖昧であることが怖いのだ。

「ねえ、千菜はどうだった？」

・・・あーあ。あたし、何してるんだろう。ときどき思う。

友達が一番大切な存在。でも、一番恐ろしい存在でもある。学校で友達といれば、いろんなことを沢山話して、一緒に笑って、大切な時間をたくさんたくさん共有していく。それが楽しい。でもいなければ、休み時間を無言で過ごして、ただ淡々と授業で与えられる、何の変哲もない学問だけを押し付けられて、そうして1日が終わっていく。つまり友達に捨てられれば、もうそれは青春時代の終了の合図。だから友達の機嫌って、損ねたくないんだ。

それでも・・・こんなふわふわして、へらへらして、なーんにも考えていなさそうな、ウザイ性格じゃ、ムカついちゃう人もいる。分かってる。でも、これはもう変えられない。

涼しくて、騒がしい教室のある机で、あたしは机に両手を置いて、千菜を見上げていた。口角を上げ、にこにこして、その笑顔が千菜にも伝わるように、満面の笑みにする。千菜が手に持つ、期末テストの成績表をちょこっと下から見つめてみると、「21」という文字が微かに透けて見えた。

次に、千菜の顔を窺うと・・・少し、頬が歪んでいた。

「また」か・・・。

前にもあった。勉強の話して、こうやって、嫌な顔をしたの。き

つとそれは、あたしの成績にあるんだと思う。自慢とかじゃないんだけど、あたし、よくテストで2位とか3位とか取るから・・・千葉は人一倍勉強を頑張ってる、それにプライドが高いから、へらへらしてるあたしに負けているって言うのが、ムカつくんだと思う。

でもね、あたしだって、それなりに努力している。本をたくさん読んで、学校から帰ったら復習して、分からないことは解決するまで、ずーっと向き合ってる。

そういうあたしを、解ってほしい・・・

「・・・どうしたの、千葉？」

あまりにも空白があって、少し怖くなった。だからちよつと明るく聞いてみる。

しかし、千葉の鋭い視線が降り注ぎ、あたしの心に少し刺さった。

「・・・まあまあ」

いつもより低い声。それがまた、あたしの不安を増大させる。

「そっか」

千葉の機嫌が少しでも良くなるように願って、あたしは笑顔で答えた。

それから、逃げるように前の明里の席に、さっきまでの体勢を維持したまま、うさぎのように跳び移った。

「ん？この花、^はどうしたの？」

その優しい声と、自然な笑顔が、あたしを癒してくれる。区別とか差別とか、そんなことはしないように努力してるけど、でも何かあると、すぐに体が明里のところへ動いてしまう。

「ううん。何となく」

あたし―この花はこんな自分が嫌いだ。みんなを包むような、そういう優しさを出したいのに、弱いあたしは、自分を護ることに精一杯。そのための「曖昧な優しさ」を、みんなに分け与えているだけ。変わりたいって思っても、変わろうとする機会がなくて・・・。

そもそもあたし、どうしてこうなっちゃんだろう・・・

もともとあたしは、生真面目な性格だった。ルールは正しい。だから、必ず破ってはいけない。どんなことも、世間で正しい方を選んだ。

「このはちゃん、まじめすぎだよ」

って、よく言われたけど、あたしは頑固で、それでも「真面目」を続けた。

駄目な子は堂々と注意して・・・ううん、そんなの嘘。あの時からもう弱かったから、何かあればすぐ担任の先生に言って、先生が注意しているのを、ただ遠くから見守っているのが常だった。

でもそれも、正しい行為だって、思ってた。

小学4年生になって、少しずつ心とか体とかが大人になってきて、それが正しくないって何となく気付き始めた。何かを先生に言うたびに、みんなに睨まれていることに気付いたんだ。

それから、いつの間にか周りから嫌われている自分がいた。睨まれ、陰でひそひそ言われて、時にはあたしにわざと聞こえるように言って・・・あの時の恐怖は、今でも覚えている。

あの時、「人から嫌われる怖さ」を初めて知ったんだ。

だから、変わろうって思った。誰からも嫌われない、良い人間に。

でも、人から嫌われない、完璧な性格にするのは難しかった。どんな人間でも、短所はあるし、それは大抵隠しきれない。どうすればいいのかさえ、あたしには分からなかった。

考えている間にも、みんなは襲ってくる。あたしはまるで、何百もの敵の攻撃を、無防備に独りで受けている様だった。

教室という名の戦場、言葉という名の矢。クラスメートという名

の軍隊は、独りの一般市民に攻撃を浴びせていく。数本の矢がその市民に当たり、血を流す。あたしはただ、こうしてやられていくだけなのだろうか……。

・・・うん、イヤだ。そんなのやだ。やられていくだけなんて、イヤだよ。まだ矢が降ってくるのだとしたら、あたしはそんな戦場に、立ち向かいたい。

―なら、あたしは戦士になればいい。

重くて強い鎧をまとして、敵の中を突き進んでいく。そして腰に携える太い剣を、思いつき振り下ろすんだ。

結果、身にまとったその鎧が、今のあたしである。

明るくて、吹っ飛んで、ふわふわ浮いてる。そしてどこかムカつく。周りの敵を味方へと替える鎧。しかしそれは重装備で、もう自分自体が見えない鎧。

でもね、その鎧をまとうのも大変だったの。弱いあたしにとっては、装備するのも大変で、まとうためにも、あたしは傷ついた。今でも、何かをするたびに、その傷口は開いて、体を鮮血が伝う。

あたしは、自分を護るだけで精一杯の、血まみれの戦士なのだ。

「そうだ明里！この夏休み、何処か遠いところへお泊りしない??」

この高校に来て仲良くなった、明里と千葉、そして美鈴。3年間も一緒だから、もっと仲良くなっておきたいと思った。

昔みたい、嫌われたくないから……。

「また唐突だなあ……」

「でもさ、もう高校生なんだよ？友達だけで、好きなところ行きたくない??」

「まあ、そうだね・・・うん、いいかも」

大人っぽい雰囲気をもし出す明里は、あたしを見下ろしながら、優しく微笑んだ。その微笑を見ると、やっぱり心が安らぐ。それに
つられてか、あたしも笑った。

「じゃあ、何処行きたい？何泊するの？」

大人な明里は、すぐに大事なところをついてくれる。

「うーん、高校生っていつでも1年生だし・・・一泊二日でもいいんじゃないかな？」

「そうだね」

また優しく微笑む。

冷房が利いて、ひやつとする教室内は、まだざわついていた。さ
つき返されたテストの成績表を見せ合ったり、プールのことなんか
話したり・・・明里の後ろに座る千菜はというと、一人で静かに本
を読んでいた。

「行き先は・・・東京で買い物三昧、とか楽しそうじゃない？」

「いいねえ！！」

その言葉を聴いたあたしの脳内にはたくさんの絵が思い浮かんだ。
今にも空に届きそうな、高くそびえるビル群。交差点を行き交う人
々。夜になっても眠らない、ネオンの光る街並み。そして宝石箱の
ような夜景・・・！！自分の胸が、鼓動を早めながら高まっていく。

「千菜はどう？」

明里が振り向いて呼びかけると、千菜は本を開けたまま、その凜
とした顔を上げた。

そして千菜に先ほどの計画を語ると、少し考え込んだ。

「いいけど・・・親が駄目って言うかも」

そう言った千菜の顔は、少し悲しそうで、悔しそうだった。

あたしはそういう顔を見るのが嫌い。まだ昔の正義が残っている
らしくてさ、その悲しみを消したくなっちゃうの。

「じゃあさっ、良かったら一緒に行こうね」

あたしは満面の笑みで答えた。すると千菜は、少し微笑んでうな

ずいた。

「美鈴はどうだろう？何処か行きたいところとかあるのかな？」

「じゃあ、聞いてくるね」

そう言うのと、あたしはしゃがんだ足を伸ばし、思いつきり伸びをしてから、千菜の席から窓側の斜め後ろに座る美鈴の席に向かって、机と机の間を縫って進んだ。

美鈴は左手で頬杖をつきながら、何処か遠くを眺めるように、窓の外を見つめている。クーラーの冷たい風が、美鈴の艶やかな黒く長い髪に触れ、微かにふわっと膨らんだ。

「美鈴。この夏休みね、4人で何処か行こうって言ってるんだけど、美鈴は行きたいところとかない？」

美鈴の前の席に座っている人が教室の何処かに行っているらしく、きちんと仕舞われていない木製の椅子が、寂しそうに存在していた。あたしはその寂しそうな椅子に、背もたれを前にするような、本当はやってはいけない座り方で腰をかけ、美鈴に問うた。

しかし美鈴はその声が全く聞こえてないらしく、未だ外を眺めていた。

「・・・聞ってる、美鈴？」

覗きこむようにして美鈴に問いかけると、美鈴はハツとなって、何も理解していないようなきょとんとした目であたしを見た。

「え、えっと・・・何？」

やっぱり、聞いていなかったらしい。何をそんなにぼーっとしていたんだろうと考えたけど、まあ美鈴には美鈴の事情があると思って、深く考えないようにした。

「だーかーらー、この夏休み、4人でどこか行かない??せっかくの高校生なんだし、行こうよ!!ね、どこ行きたい??」

美鈴の目はまだ虚ろで、どこを見ているか分からなかった。しかし、しばらくすると、また外を見て、こう呟いたのだ。

「・・・田舎に行きたいな」

・・・予想外だった。まさか田舎と来るとは。

「そっか。じゃあ、行けそうなの？」

「うーん、多分」

「わかった」

あたしは笑顔を見せて席を立ち、また机の草むらをくぐりぬけた。

「どうだった？」

「田舎がいいって」

「田舎！？」

明里は啞然とした。そりゃそうだ。あたしだってビックリしたんだから。

教室にいる生徒が生む喧噪に、あたしたちは包まれていた。

あたしは、今この生活が好きだ。

確かに鎧は被ってる。自分が見えない、重たい鎧を。でも、それでも、そんなあたしを受け止めてくれる友達がいるから、どれだけ血が流れても、いつの間にか苦しさなんてなくなって、重たいはずの鎧も軽く感じられて、今は毎日が楽しく感じる。

人生は物語だって、格好つけてる人はよく言う。それぞれが、それぞれの物語の主人公なんだって。でもあたしはね、今「この花」という物語の立派な主人公を演じるよりも、「明里」・「千菜」・「美鈴」、この3つの物語の立派な脇役を演じて、3人の青春をより一層輝く物語にしたいって、そう思うようになったんだ。

だから、

あたしは輝き続ける。この、偽りの明るさで。

The Small and The Big World（現在）（前書き）

あの時、いつも私の目の前に広がっていたのは、「小さくて大きな世界」だった。

季節外れの白詰草、最後の葉は、戸惑いながら飛び立つ。

The Small and The Big World（現在）

それは、不思議な世界。

横長の長方形をした、自らの2つの瞳に収まる、小さくて、でもその奥にあるものは大きい、光放つ、眩しい世界。

偽りの名で語る、真実の会話。

手先に触れる、限られた動作で広がる言の葉。

私が伝えようとする、あの時も、会話が流れていく。

『北海道行くの??』

『そうだよ』

『じゃあ 会えるかなww』

画面を通して語る会話。それは現実にある、「先輩」とか「後輩」などの境界を曖昧にしてくれる。

私はまだ慣れないタイピングを必死で打った。

遠い皆と、出来るだけ近くにいたかったから・・・

「そうだ明里！この夏休み、何処か遠いところへお泊りしない??」
高校一年の7月。期末テストの成績が返され、少し教室がざわついていた。

外はもう、直射日光とアスファルトからの熱の反射でじめじめとする暑さ。この学校もさすがに、クーラーを付け始めた。

そんな中、私の席の端に両手を軽く掛け、私を下から見上げるこの花^はがきらきらとその瞳を輝かせながら言ったのだ。

「また唐突だなあ・・・」

「でもさ、もう高校生なんだよ？友達だけで、好きなところ行きたくない??」

「まあ、そうだね」

あまりにも急な提案で少し動揺したが、考えてみればそういう夏休みもいいなと感じた。

「うん、いいかも」

そう言うのと、この花は嬉しそうに、子どものように笑った。

人生で輝くときなんて、何十年も生きている中で、きつとこの高校生活付近の数年間しかない。若くして偉そうなことを言っているかもしれないけど、人生なんて、ゲームのようにやり直すことは出来ないから、そういうことは早い段階から認識しておきたい。だったら、この3年間、出来るだけ充実したものにしたいと思う。

「じゃあ、何処に行きたい？何泊するの？」

そしてそれなら、きちんと計画を立てて、無駄のないような夏休みにしたい。……こういうの、この花曰く「ちゃっかりさん」というらしい。

「うーん、高校生っていつでも1年生だし……一泊二日でいいんじゃないかな？」

「そうだね。行き先は……」

『神奈川かぁ いいなぁ』

私はいい行き先を色々と考えてみた。海、登山、避暑地……京都でお寺めぐりっていうのもあり。

『じゃあ、今度来てみる??』

でも、何故か……

『うん!!行ってみたい!!!!』

不意に昔の会話が頭をよぎる。

『あたしも行きたいけど、新幹線使わなきゃ無理だね』

『でも、たぶん私もだよ♪』

……いつの間にか重くなった、固い口を開く。

「……『東京』で買物三昧、とか楽しそうじゃない？」

「いいねえ!!」

結局、その「昔」に負け、先ほどの頭に浮かんだ案を押し切ってしまった。

どうしてか、最近あの時の映像がよみがえる。

それは、出会ったのが夏だったからか、それとも・・・あの時のみんなと同じ年齢になったからなのか。

どうしてかは解らない。

でもそれは、今でも忘れられない、私の近くて遠かった、今はもう会うことの出来ない仲間との記憶・・・。

出合いはパソコンしていた時、あるサイトのチャット機能だった。部屋がいくつかに分けられていて、ドアを叩けば、そこには都道府県の遠近を越えた、現実では見られない絆が見て取れる。

中学二年の夏、そんなチャット機能にはまっていた私は、1つの部屋の扉を開けたのだ。そこで出会ったのが、「あず」・「ていらみす」・「飛鳥」の3人だった。目の前で繰り広げられる会話は、私にとってとても輝いているように思えた。

だから、その仲間に加わったのだ。

そこで私に付けた偽りの名は「明」。自分の名と同じ「あかり」と書いて、いつか聞いた「みん」という読ませ方をした。

『明って・・・あかりって読めばいいのかな??』

『いえ、みんなって呼んでください』

そんな会話も、あった気がする。

あずはその時、短大の1年生。ていらみすは高校3年生。飛鳥は高校1年生と言っていて、私は4人の中で1番年下だった。

『みんなはどこすみ?? アタシは神奈川』

『おっ 私も神奈川だよー』

『あたしは北海道』

皆の住んでいるところを見て、少し遠いと思った。

それでも、この小さな画面を通せば、そんな遠いところでも会

話ができる。

それから2時間か3時間ぐらいつつとその部屋で話していた。自分のことや周りの話。学校の流行りとか、芸能界の話・・・話の内容はいつしか何気ないことばかりになっていた。近くに居ないからこそ言える、友人の愚痴も、いつの間にかみんなで語っていた。そして最初に使っていた敬語は、時間が経つごとに消えていったのだ。『そろそろおいとまする???』

『そうだね もうこんな時間だし』

それを見て自分の部屋を見渡すと、カーテンの閉まっていな窓の外はもう真っ暗になっていた。タンスの上に置かれた時計を見ても、とうに夜の7時を超えている。

『えー 結構楽しかったのになぁ』

『うんうん!! このチャット始めて、こんなに楽しかったことないよ!!!』

そこで切り出したのが、あずだった。

『じゃあ、アタシのブログ来る???』

その後私たちは、あずが自分のブログに作った新しいページのコメント欄を利用して、ときどき話すようになった。

何もかもが他愛もない話で、きっとここでしか会うことの出来ない、一生それぞれの顔を見ることもないだろう関係だけど、それでも私にはみんなの笑う姿がよく浮かんでいた。

1番年下ともあって、ときどき分からない会話もあったけど、頑張っつてついていた。今思えば、そういうもどかしさが見えない画面の上だからこそ、頑張れたんだと思うんだ。

『高校の勉強がわからな〜い!!!』

飛鳥が不意に、そんなことを叫んだ。いや、叫んだのかどうかは分からない。でも、「叫んで」いたように見えた。

『高校の勉強って、そんなに難しいの?』

私はあの時、中学校の授業はなんとなくだけど、全てきちんと理解していたし、高校もきつと、そんなものだって思ってた。だからこの言葉が来たときは、すこし驚いたのだ。

『難しいよー 中学とは比べ物にならない（へー）ー☆』

『今度成績悪かったら、ケータイ取り上げとかないよ・・・』

『大丈夫っ アタシも高校時代は赤点なんて何度も取ったことあるよ（ノー△ー）ノ』

『あず それフォローになってない（笑）』

悩みを発しているのに、楽しそうに語るみんなは、すごく笑っているように見えて、それを見ている私も何だか楽しくなった。

そんな毎日が楽しくて、家に帰れば階段をどたばた鳴らしながら2階の自分の部屋に入って、すぐにパソコンのスイッチを押していた。

あの時、私がパソコンのスイッチを押すたび目の前で光りだす液晶画面の奥に広がるのは、触れることは出来ない、小さくて、でも私とみんなをつなぐ大きな世界に思えたんだ。

『荒らしが多いので、このブログを閉じたいと思います。』

新しいブログのURLを知りたい方は、コメかメールで知らせてください。』

あずのブログのトップに、黒の太字で大きくそう書かれていたのは、3人とあって半年経つか経たないかの時だった。

それを見たときは、もちろん新しいあずのホームページを教えてもらおうと思っていた。新しい部屋でも、また何気ない話で盛り上がった、笑って・・・そう考えながら、マウスを滑らかに動かした。しかし、どうしてだろうか。同時に自分の心の何処かで、その行動を引き止めんとするものがいた。急にではない。もともとあったものが、膨らんでいく。膨らみは勢いを増し、気持ちを満たす。

私はそれに負けじと、そのページ下にあるはずのコメント欄にマウスを動かす。

だがそれが、私の心に再び拍車をかける。

『新しいの 教えて!!』

『荒らしって大変だもんね URL教えてくれない??』

『あずさんの新しいホームページ 教えてください』

コメント欄には既に、たくさんコメントが押し寄せていた。

あずは私たちの部屋以外にも、何十個ものページを作っていて、サイト内の友達はたくさんいることなんて、もともと分かってた。それに、あずとていらみす♪は住んでいる場所が近いからか仲がよく、私と1番歳の近い飛鳥は自分のホームページを立ち上げて、みんなを招待していた。

みんなと私との間に、「溝」を感じたのだ。

いや、もともとあったんだ。私があのかのサイトのあのチャット部屋へ入ったときから、「大人」と「子供」の、境界が。

拍車は、止まった。

「・・・もう、いつか」

私は諦めた。

それでも閉鎖直前まで、いつもの部屋で語った。もうすぐ会えなくなる、分かっているけど、それでも寂しくなんてなかった。ブログ閉鎖の話なんて、一度も出ることはなかったし、新しいブログの場所をさがさない私に、あずは何も言わなかった。みんなと、最後の最後まで、今までどおり、楽しく会話をしていた。

—そうして、ブログは閉じられた。

美鈴のところから、この花がちよこちよこと可愛いしぐさで帰ってきた。

「どうだった？」

「田舎がいいって」

「田舎!？」

この花・千菜・美鈴・そして私、この4人での泊り計画は、未だ目的地を決められないでいた。そして少し遠くに座る美鈴の意見を聞いてきたこの花の報告に、驚愕しているところである。

「どうするー?」

あまりの意見の違いに悩まされていると、教壇に立っていた先生が席に着くよう生徒に促した。

「じゃあ、あとで集まって決めようよ」

「わかった」

小声でそうつぶやくと、この花は自分の席へと舞い戻っていった。

先ほどまでの喧噪は消え去り、教室に静寂が満ちてくると、先生は教壇に美しい身なりで立ち、ゆっくりとルージュに染まった口を開いた。

「えー、明日の予定ですが、明日は1時間目から塾から先生をお招きして、学年全体で大学受験についての講義を聴いてもらいます。」

高校受験が数ヶ月前に終わったばかりなのに、進学校であるこの高校では、早くも大学受験の話である。

今の私は、どこに向かおうとしているのかが分からなくて、勉強する意味も分からず、ただぼーっとしているだけである。当然、難易度の上がった勉強が進まなくて、中学生に維持してきた成績は、下降傾向にあるのみだ。

『高校の勉強がわからなーい!!!!』

そう。飛鳥が言ったあの言葉は、正しかったのである。

今ではその成績のために、母に怒られてばかりで、あの時の笑顔なんて、もう忘れてしまった。

でも・・・

みんなと会ったとき、私がまだ中学生で、あの辛さが分からなかったとき、高校生活を経験しているみんなはすごく楽しそうに笑っていた。それは私が追いつけないほど眩しかったのだ。

今では画面の向こうで輝いていたみんなは、私にとって憧れの存在である。

ねえ、今みんなはどうしてる？ あずは大学を卒業して、就職とかしたの？ という会社？ ていらいみす♪は高校卒業したよね。大学とか行っただのかな？ 飛鳥。飛鳥はもう高校3年生なんだね。大学受験はするの？ 受験ってさ、大変だよ。私も今年、初めて経験したんだ。

・・・私？ 私は高校生になったんだ。憧れていた可愛い制服で、初めて電車で通学して、学校での友達も、いっぱい、いっぱい出来たんだよ・・・

そう、みんなに伝えたい。でももう、そのみんなに会う手段はない。

あずの新しいブログの場所も、飛鳥の初めて立てたホームページも、あの広いインターネットの中では何処にあるのか分からないのだ。

家に帰れば、自分の部屋に入って最初に目に飛び込むのはいつも、もうあまり付けることのなくなった、あの古いシルバーのノートパソコンである。そして時々付けて、インターネットにつなげば、真っ先に調べてしまうのは「あず」の文字。しかし、もうその検索結果に、あのブログは現れない。そうして私は勝手に、淋しさと孤独に浸るのだ。

でも、高校生の私は前を見なければいけない。

見た先に見えるのは、幸福や笑顔だけじゃない。苦難や、悲惨なことだってある。進んで行けば、立ち止まったり、壁にぶつかったり、ちょっとした事で転んじゃって・・・。そしてその度に思い出すだろう、あの時の楽しい日々を。でも私は、そんな現実に直面し

ても、絶対に諦めたくない。これから現れるどんな困難にも、いろいろ考えて、いろいろな手段を使って、必ず立ち向かってやる!!

だから今は、勉強のことも、大学のことも、目に見える全てを受け入れて、身近なことから頑張って、いつかみんなに追いつくよ。

だから・・・

私はふと、まぶたをそっと閉じてみた。そこには、私が想像する、あずとていらみす♪と飛鳥の笑顔が、ゆらゆらと水面を揺らめくように浮かんでいた。

暗闇の中に浮かぶ3人、その笑顔は溶けるように、ほどけて、広がっていく・・・

『ばいばい。』

私は心の中で、みんなにコメントを送った。

S u m m e r C l o v e r s へ未来へ（前書き）

高校1年の夏。

自分達の過去に、そして未来に、4人の少女は何を感じたのだからか・・・。

夏の陽射しに照らされた4枚の白詰草は羽ばたく。

Summer Clovers 未来

目の前に蜉蝣が見える。

影で休める私にとって、外の世界はいつそう眩しく見えた。

「明里、何時まで日焼け止め塗ってんのー?」

この花が心配してか、私のいるキャンプタープにちょこちょこと近寄ってきた。

そういう私が手に持っていたのは、今日のために買ってきた、絶対肌を焼かない最強の日焼け止めと謳われる代物。こんな炎天下の中、こんがり焼いてしまうのは御免である。

「あ、いや、すぐ行くから・・・」

「それ、さっきも言ってたような・・・」

「今度は本当!! あと首回りだけだからさ」

「そう。じゃあ、待ってるから!!」

そう言うのと、この花はピンク色のぺたんこサンダルを躍らせながら、目の前の川へと飛び込んでいった。

結局、夏休みのお泊り計画の行き先はキャンプ場となり、それならさすがに大人が居た方がいいということで、千葉のお母さんに付き合ってもらった。

街の郊外にあるこのキャンプ場には他の人も居るが、緑に囲まれ、目の前には身にしみるほど冷たい川が流れ、涼やかな風が優しく吹き抜ける。何より街より気温が低いので、過ごしやすい。しかし、太陽光線の威力だけは変わらない。

そして今は、着いたばかりの自由時間である。だから私は、自由に日焼け止めを塗っている。

蝉が調の合わない合唱を繰り返す。蚊が少ないのは幸いだ。

ふと、私は深緑色をしたタープの影から、みんなの様子をうかが

つてみた。

まず美鈴はというと、着いて早々、磁石のN極がS極に引かれるように、颯爽と川に跳び込んで行った。田舎へ行きたいと言っていたらしいが、その理由と関係があるのは間違いないと推測する。

テントなどを立てた後、また川に向かい、大きな岩に座って冷たい川水に足を入れ、ゆっくりとその足を上下させながら今に至る。美鈴らしからぬ行動の連続で、意外と興味深かった。水に浸る裸足を水面からすくい上げると、まとわり包む清水が、足の甲から流れ落ちる。

日光を浴びながらも、帽子をかぶり、そこから垂れる艶やかな黒髪をふわふわと揺らして、大和撫子のようなその顔を微笑ませる。会ってからのこの3ヶ月間、滅多に見せなかった笑顔がそこにあった。

千葉はというと、着いた直後にみんなの役割分担をきっちり決め、タープとテントを組み立て方を見ながらきちんと立ててくれた。さすが千葉である。

この計画を立てたとき、「親が駄目って言うかも」と言っていたが、その親が来てくれたということは、認めてくれたということだろう。

その千葉は今、テントの影に千葉のお母さんと共に休憩している。テントとタープの距離が近く、時々2人の話し声が聞こえるのだが、「まあ・・・いいかもしれないわね」と千葉のお母さんの声が聞こえて、ちらっと窺うと、彼女は少し皺の入った顔をくしゃっとさせていた。それを見た千葉の凜としていた顔も、微笑を見せた。

その口角を上げた2人の口元が似ていて、親子だな・・・って思っていた。当たり前のことか。

この花は、テントなどを張るとき、意外にもきっちりと手伝っていた。その顔は、真剣そのものだったのである。いつもふわふわしているこの花のあの姿を見て、違和感があったが、それを終えると、いつものふわふわで明るいこの花に戻っていた。不思議である。

今は美鈴から少し遠いところで川に入っているのだが・・・また不思議である。

川の真ん中で、ただ突っ立っているだけ。両腕は重力に逆らうことなく垂れ落ち、ただの付属物のようだ。目は虚ろで、しかし目の前を流れていく清水を見つめている。そのさらさらと清水が、肩幅に開いた足を、ふくらはぎまで包み込む。柔らかな木漏れ日がぽつぽつとこの花の頭や肩を照らす。風が吹くたび、その木漏れ日がゆらゆらとうごめく。

無気力なようで、何処か力強い。その姿は、私の中のこの花の印象を少し変えた。

私はというと・・・未だ日焼け止めを塗り続けている。

「きゃっ」

蝉たちの大合唱と、吹き抜ける冷たい風に浸っていると、川の方から甲高い声が聞こえた。

見ると、先ほどまで不思議な光景を創っていたこの花が再びいつもの調子に戻ったらしく、川の冷たい水をすくって、顔をにやにや引きつらせながら、岩に座って足を川に浸かっていた美鈴に向かってばら撒いていた。

「どう？冷たかった?？」

「冷たいに決まってるよ!!」

その困ったような、でも嬉しそうな顔を美鈴が見せると、またこの花は水をかけ始めた。

やられてばかりで火がついたのか、美鈴がいつもは見せないよう

な、意地悪な顔を見せ、少し跳ぶようにして川に入った。そして「このー！」とか言いながら、慣れたように水をすくい上げ、この花とは比べ物にならないほど大量の水を携えて、空中へと放った。その水玉は綺麗な放物線を描き、この花の元に降り注ぐ。結果、この花の服は水浸しになってしまった。

「ご、ごめん！！そこまでやるつもりはなかったんだけど・・・」
「いいよ、いいよ。っていうか美鈴、なんか上手だね！！」

慌てふためく美鈴に、この花は満面の笑顔で答えた。

「ほら、明里！！この川の水、すっごく冷たいよ！！こっち来なよ！！！！」

「うん、すぐ行く」

「千葉もー」

私は塗り残していた首周りを急いで塗り始める。

千葉が先にゴム製のサンダルを履いて、テントから飛び出した。漆黒の髪が夏の太陽を反射して光の輪を作り、千葉が地を蹴るたび、そのショートヘアが広がったり縮んだりを繰り返す。その姿を見守る千葉の母の姿は、とても幸せそうで、しかし何処か寂しそうでもあった。

そう、ちょっとした人間観察をしている間に、やっとなさ日焼け止めを全身に塗った私は、心を決めて立ち上がった。

川のせせらぎ、蟬の大合唱、吹きぬける風、人々の明るい声・・・タープの影とおさらばすると、髪に、肩に、顔に、直射日光が照りつけて眩しかった。慣れてきて空を見上げれば、とても鮮やかな空が見えた。

その視線をふっと下に戻せば、木漏れ日に照らされるこの花・千葉・美鈴がこちらを見ていた。

みんなの顔に浮かぶのは、あの時、パソコンという名の世界では見られなかった「本当の笑顔」。それは、幸福とか、喜びとか、希望・・・たくさんの意味が籠もった、無言の情報伝達方法。それを見て私も、口角を上げて微笑み返す。

私は小石の転がる地面を強く蹴った。その時の体は軽くて、ふわふわしてて、まるで背中にふかふかした白い羽が生えたようにも思えた。その空想上の羽は私の前進する行為を助け、すぐにみんながいる川へとたどり着いた。

足を入れると、水しぶきが散った。でもそれは、思った以上に綺麗で、冷たくて、そしてそれが太陽の日光に当たると瞬き、はじけるように川へと落ちていく。当たり前のようで、しかし初めて見たその光景に今にも溢れそうな幸福感で、私は満たされていったのだ。

—そんな、まだまだ未熟な4枚の葉が織り成す、夏に花開いた物語。

Summer Clovers（未来）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。再び玉梓です。

しかし、結局この話何だったんだヨ、と思われた方もいると思います。

それを今回、玉梓さんは解説という名の弁解をいたしましょう。

さて、この作品は最初に話した通り、本当はpixivに投稿したもののなんですね。

と、言いますのも、この作品は7月に参加したある企画の小説だったんです。1週ごとにテーマを決め、それに沿って作品を作るということで、どうしてこうなった。

夏に書いたので、舞台も夏。1つ出来るごとにまた次のを書きはじめるというサイクルを1週間ごとにしていた、あの頃の自分を褒めてあげたいです。

さて、高校1年生の心情を書いたものだったんですが、あの4作品のうち、2作品は実話をもとにしています。どれとかは言いませんが、まあ懐かしいなあと思いながら、1週間クオリティの作品共を改編していきました。

また、最後のSummer Cloversは、もともと明里の話の最後に引っ付けてたやつをびりびりと剥がしたやつですね。だから明里視点なんです。今思えば、あの人は最初から、完全にただの話のまとめ役でしたね。キャラも1番定まっていなかったし……。

大人っぽいのか、子供っぽいのか、それは玉梓さんにもわかりません。

兎に角！！

このような何を伝えたかったのかも曖昧な感じに終わった駄作を読んでもいただき、ありがとうございました。

では、またの機会に・・・

・・・よし、夏の次は春ダナ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6508x/>

夏に咲いた白詰草

2011年11月6日15時02分発行